特集 わたしが願う21世紀

都市林の保全を通じた持続可能な地域づくりを目指して

田並　静
自治労横浜市従業員労働組合緑政支部

私は、5年間一貫して横浜市で「市民とのパートナーシップによる都市の樹林地の保全」に関わってきた。「樹林の保全を通じて、持続可能な地域づくりをいかに進めていくか」をテーマにしながら進めて来たので、この経験を踏まえた上で、21世紀に向けた夢を少し書きたい。

1 都市で樹林を保全するということ―

近年、林業の衰退や薪炭林の利用がなくなったことにより、全国的に森林の管理が行き届かず、荒廃が進んでいる。このような背景から、市民参加による森林保全の取り組みが全国的なブームになり、多くの自治体で様々な取り組みが進められている。その多くの事例を見て感じることは、市民が「森林保全に参加」しているということである。私は、この市民が「参加」するという受動的な関わり方に疑問を持ち、より市民が「主体的」に樹林保全に関わる方法はないかを模索して来た。

では、都市の樹林を市民が主体的に保全する場合には、どのようなやり方があるのだろうか。

横浜市は、地形が丘陵地のため、市街地の中まで樹林が入り組んでいる。斜面緑地は開発から取り残され、視覚的に緑が多いように感じることができる。従って、市民にとって、樹林は身近な存在になっているといえる。

私は、「市民にとって身近な樹林」と「樹林の保全活動に関わりたい市民」を結ぶ仕事に5年間関わってきた。あくまでも市民が自分の生活圏（ここでいう生活圏とは、歩いて、または自転車で移動できる圏内）の中にある樹林に市民が関わっていくためのコーディネートをしている。

なぜ、生活圏にこだわるのか。それは、そこに住む方々が樹林に最も強い関心を持っているということもあるが、それよりもむしろ保全活動の継続性を確保するという点からである。やはりフィールドが電車で行くような場所だと活動を長続きさせるのが難しいのである。森林の保全活動を共有の庭を手入れする感覚で、つまり“市民の日常的な”活動として位置付けることが大事だと感じている。

まず、市民自らが保全活動の対象となる樹林の調査をしながら、現在ある魅力資源を発掘し、その魅力資源を最大限に生かす方策を考えることから始める。魅力資源とは、例えば「シダ類の宝庫」など生き物の賑わいの場合や「谷戸の原風景」など景観に関するものだったりする。これは、樹林によって固有のものであり、その樹林の個性である。

私たちの仕事は、地域に住む人たちが樹林の個性を大事にし、あるいは引き出しながら、樹林を「コミュニティの場として共有できる」ことを最終目標にしている。このように、都市の強みを生かして、従来の「市民参加」による森林保全から脱して「市民主体」による「地域の資源としての樹林の保全」を目指しているのである。

2 地域の資源としての樹林 ――コミュニティの再生の場として

樹林はどのような資源になりうるのか。大気の浄化、気温上昇の抑制、水源涵養など樹林の公益的機能を

あげればたくさんあるが、ここでは、“都市に住む市民”が関わることによって樹林が「コミュニティの場」になりうるという視点からまとめてみたい。

ただ、都市部に存在する多くの樹林は私有地である。つまり、それぞれに所有者がいるのである。

私有地でありながら、樹林は、その地域に住んでいる市民にとってもかけがえないものになっている。林業の衰退によって私有林が経済性を失った今、その保全・管理をその所有者にまかせっきりにするのではなく、恩恵を受けている市民も一緒に担っていくことが求められている。

所有者が樹林を市民にオープンにし、そこに地域全体が関わることによって、今まで接点のなかったコミュニティ内の人たちの交流が生まれることが期待される。樹林は、今まで交流のなかった市民どうしが“つながる・出会う”「場」としての装置になりうるのである。私は、この「場」をコーディネート（樹林を所有者から借りたり、市民が樹林に入ることを了解してもらうなど）することを仕事にしている。あくまでもこの「場」を活かし、樹林保全の担い手になって行くのは市民である。

市民が樹林の保全活動に関わることによって、「生物の多様性を高めたり、より景観を優れたものに変えていく」ということももちろん大事であるが、“樹林そのものの状態の変化”ではなく、“樹林に関わることによってコミュニティがどう変化したか”というプロセスを、私は重視している。

「どのような樹林を目指すか」、「どのように活用するか」、「どのようなルールで樹林を保全するか」など、市民が樹林保全をする場合、地域で共有しなければならない目標はたくさんある。この共有化する作業（＝合意形成）を通じて、所有者が樹林を守ってきた思いを市民が知り、また所有者は市民の樹林に対する関心の高さやニーズを知ることにつながる。この合意形成のプロセスを通じて、樹林の保全に止まらず、地域全体が元気になって行けば、「地域のコミュニティの再生」につながると考えている。

コミュニティ再生の切り口は、その地域の魅力資源の違いによって異なる。「場（＝樹林）」を活用することによって、いわゆる地縁でつながった地域（＝自治会や町内会）を関心・テーマ（＝樹林保全）でつなぎ直すきっかけにもなる。テーマとは、樹林保全をはじめとした環境保全、福祉、商店街の振興などまちづくりの切り口である。テーマで集まった人たちが関わることによって、画一的な地域から個性のある地域づくりにつながると考えている。

3 樹林保全における、様々な主体の役割分担

合意形成のプロセスを通じて、樹林保全において各人が果たす役割とは何かということも議論される。それぞれが自分の役割を果たし、責任を負うことで、より樹林に深く関わることになり、自分の問題として捉えることができるようになるのである。

樹林を保全するには、「樹林所有者＝農家」、「樹林所有者ではないが、周辺に住む市民」、「行政」と大きく分けて3つの主体が関わっている。では、それぞれの主体の役割とは何か。

まず私自身が属しているセクターである行政の役割についてだが、他の2つの主体である「樹林所有者」と「市民」の“出会いの場”を初期の段階で作ることではないかと考えている。行政はあくまでも黒子であり、他の主体がそれぞれの役割を果たせるようにコーディネートをすることに徹している。まず、行政は所有者から樹林を借り、市民が入ることができるよう条件整備（遊歩道の整備等）をする。次の段階として、この樹林に対する地域のニーズを調べ、保全を必要としている樹林があるという情報を発信する。できるだけ多くの地域に住む人たちが、樹林保全の担い手となれるよう技術的・人的にバックアップしていく。これには、専門家や既に活動をしている森林保全団体の協力を得ながら進めている。

一方、「所有者」に最も求められるのは、樹林を開発せずに保全するという選択をすることと、今まで地域で守ってきた伝統技術を市民に継承（炭焼きなど）す

ることや地域のルールを伝えることだと考えている。

「市民」は、「樹林所有者」とともに地域を再生する担い手・主体であるため、その地域の将来像を描き、目標に向けて行動することが求められる。例えば、その地域の自然環境や伝統的な行事の再評価をし、それを継承し、現代に合った方法で創造することである。

「樹林所有者」も「市民」もそれぞれにたくさんの期待や夢を樹林に持っている。ここで、異なる主体間の合意を作り、地域の様々なニーズをつなげるコーディネーターが必要となる。ここでいうコーディネーターとは、地域に密着して、人材を発掘し、人材どうしをつなげ、人材と素材（＝樹林地）を結ぶ役割を担う。

行政がその社会的信用度を生かして初期の段階で、農家の方々を説得し、市民との接着役を担うことは有効だと思うが、ある一定の段階を過ぎた後は、地域にまかせる覚悟が必要だと感じている。

市民による都市の樹林の保全活動は始まったばかりである。現在は、所有者と市民の仲立ちを行政が担う形になっているが、将来的には、「所有者」と「市民」の間に入り、双方が地域に問題意識を持ち、地域を見直し、地域の目標を共有していくためのコーディネートをする第4の主体として、NPOの役割が期待される。

もちろん、樹林を借りるなど、契約関係を結ぶ先としての行政の存在意義は残ると思うが、地域内の合意形成を図るという点では、より地域に密着できるNPOが担った方がうまくいくのではないかと感じているのである。

4 最後に、21世紀への夢 —都市の樹林を里山として再生する

都市では特に、地域コミュニティの中の関係性が希薄になってきているといわれている。しかし、むしろ21世紀は、人々が地域コミュニティを見直す時代になるのではないかと考えている。「樹林の保全活動」が、この地域コミュニティを見直すひとつのきっかけになってほしい。地域の魅力資源である「樹林」に関わることによって、樹林の中のことに止まらず、市民自らが地域の抱えている問題・ニーズに気づき、時間をかけてじっくり合意形成をしながら自ら解決して行く、そんな流れになっていけばと思う。市民が地域に深く関わり、地域のルールを作り、自らのニーズを市民自らが担う時代、それが21世紀だと思う。

「樹林の保全活動」による地域づくりのあり方として、樹林地・田畑・住宅地を一つにくくって、樹林の恵みを循環させる新たな系として捉えることができる。循環型の地域づくりは、1960年代の燃料革命まで、雑木林と田んぼ・畑の営みがつながった“里山”そのものであったといえる。私が関わっている横浜市の樹林も、40～50年前までは、里山の機能を有していた。ところが現在では、樹林と人の関わりがなくなって、「里山的景観」と「樹林の恵みを循環させる里山ならではの仕組み」が崩れてしまった。この壊れてしまったシステムを再生できないか。

20世紀の半ばまで続いていた里山の営みをそのまま元に戻すことは不可能である。21世紀は、“現代人のニーズに合った新しい”「人」と「樹林」を結ぶシステムとしての「新里山」を作っていきたいと考えている。

都市に住む市民のニーズは様々である。樹林地にヒーリング効果を求めて来る人もいれば、子どもの環境教育や総合学習の場を期待する親たちや先生たちもいる。一方、自己表現の場として、芸術活動や音楽活動の場にもなりうる。もちろん、昔ながらの炭焼きや落ち葉かきを復活させて、「農」とのつながりを再構築していく必要もある。

自然と人間のつながりを壊してきた20世紀だったように思うので、21世紀はこの「つながりを再構築する世紀」であって欲しいと願っている。近年、「循環型社会」や「持続可能な社会」という言葉をしばしば耳にする。「社会」と言ってしまうと、どこから取り組んでいいのかイメージが湧かないが、もっと小さな単位である地域コミュニティ内の持続可能性であれば、ひとりひとりにできそうなことがあるように思う。私は、横浜の中のさらに小さなエリアから、「新里山づくり」を通じて、持続可能な地域づくりを追求して行きたい。